

近代日本における経済エリートの心性

——四人の企業家のテキストをめぐって——

永 谷 健

一 目的

近代日本の企業家精神は、どのような内容であったのか。すなわち、維新以降、あえて経済的なリスクを冒し、実業界へと身を投じて富の獲得を目指し、日本近代化の主役となった企業家（ビジネス・リーダー）たちを内面から支えたエートスとは、いかなる内容であったのか。本稿の目的は、実際に致富し、経済領域のエリートとなった企業家自身が残したテキストから、彼らの経済活動を内部から支えた動機や価値意識を探り、同時にそうした動機や価値意識に一定の影響を与えた歴史的社会的文脈に接近することにある。本論を始める前に、こうした問題領域の近接分野およびその意義について、次章で若干述べておきたい。

二 研究の意義

近代日本の企業家そのものに関する研究は、明治期における企業家の封建的出自の特定を目指す一群の研究、特定企業および特定企業家の経営理念・経営方針・経営戦略などに関する研究といった経営史学の分野で、これまでなされてきた^①。しかし、日本の近代化の重要な部分を担ったそれらの者たちの属性を特定するという前者の総合的・体系的な研究に決着がついていないとともに、企業家精神に関わる後者の研究が、個別企業の研究という形式でなされ、しかも企業経営という限定された活動領域に表れた行動や言説を追跡する作業に留まっているのである。個別研究を横断する体系的な研究、それも企業家精神を総体的に把握する研究ないし整理が求められていると言ってもよいであろう。本稿はそうした体系的な研究の試みの一つである。

このように先行研究の少ない分野であるが、日本の近代化を内面から支えたエートスという経済面に問題を限定しない、より広範なコンテキストでは、社会学ないし教育社会学の分野における「立身出世主義」に関する一連の議論が、企業家精神を包み込む議論、企

業家精神に関する研究に社会学的な補助線を提供してくれる議論として有益である。すなわち、日本近代化過程における職業的上昇移動の嚮導原理を析出する分野であり、そうした嚮導原理の一種として企業家精神を位置づけてみるのは有意義であろう。

その代表的な論者として、たとえば見田宗介は、「明治以来の急速な近代化過程において、内面的、主体的な推進力を用意したもの」、あるいは「日本型資本主義の急速な発展をその方向に推進してきた内面的な動力」、すなわちウェーバーによるプロテスタンティズムの倫理の近代日本における対応物こそが「立身出世主義」であると捉える。そして、庶民の社会的上昇装置として現実に機能した学校系列・官員登用の各制度に対して、そうした進路に進めない低学歴層の〈観念の誘導路〉として機能し、近代を底辺から支えたのが努力・勤勉を強調する精神主義、すなわち〈金次郎主義〉であるとした。〈金次郎主義〉は現実に対する批判性が乏しく、個人のアスピレーションの追求と国家の利益との「幸福な予定調和」を前提とするという。したがって〈金次郎主義〉は、「封建遺制の残存にむしろ依存して食いつぶしながら、生産力の面においては急速に高度の資本制生産を実現していくために『上からの近代主義』を推進する支配層」が「見出した、かっこうのイデオロギー」であったという（見田：185,189,194）。

このように、見田は「立身出世主義」の中心に〈金次郎主義〉を据えつつ、それを学歴至上の社会的序列の代償満足として機能し、かつ、政府・官僚による大衆馴致の手段としても機能する、いわば受動的なイデオロギーとして析出していると言えよう。

こうした「立身出世主義」に関する議論は竹内洋によってさらに細分・洗練されている。「立身出世主義」は時代によって変化し、明治20年頃までは上昇移動の経路・資格の未整備のために急速な上昇の可能性のあった〈英雄的僥倖的立身出世主義〉の時代であったが、明治20年代からは、学校制度・官員登用制度の確立によって、秩序的な進路を辿って地位アスピレーションの達成を図る〈秩序的立身出世主義〉の時代となった。そして、この時期から、学校系列に乗れない者たちが、地位アスピレーションの達成から経済的成功による金銭的アスピレーションの達成へと乗り換えるという「成功ブーム」が始まったという。竹内はそうしたアスピレーション変換の現象を「代替」と呼ぶ。ただ、こうして加熱したブームもアスピレーション達成の十分な行路とはならず、一部は受験・苦学へと回帰し、一部は修養主義へと吸収されたという。すなわち、明治30年代からは人材過多・教育過度により社会的上昇の実現可能性が減少したという社会的背景から、克己・勤勉を推奨し人格の完成を図る修養主義が、達成されないアスピレーションを低下させる機能を果たしたという。竹内はこれを「縮小」ないし「冷却」と呼ぶ。また、こうした機能の反面、修養主義は一步一步の上昇移動、すなわち「段々出世」のための手段としても機能したとし、

一足飛びの上昇がありえないこうした時代のエートスを、竹内は〈修養的立身出世主義〉と名づけるのである（竹内：172-82）。

さらに、「社会的階梯上昇の心構え」として「職務に野心を集中する」「第一等主義」を意味する神島二郎の用語、「藤吉郎主義」を、この「段々出世主義」の意味合いを加えて再定義し、「藤吉郎主義」をこの時代の地位アスピレーションの達成方法、いわばアスピレーションの「縮小」による「段々出世」として捉えなおす。同時に「金次郎主義」も、「藤吉郎主義」の要素のうち、「職務に野心を集中する」「第一等主義」が純化した形式、いわば「働き主義」の形式として捉えなおされる。「藤吉郎主義」が地位アスピレーションへの手段であったのに対して、「金次郎主義」は金銭的アスピレーションへの手段として小自営層には機能したという。このように、受験の社会史の立場から、「立身出世主義」の変容過程とアスピレーションの行方が精密に辿られた（竹内：179-80）。

ただ、この精密な議論が「立身出世主義」のすべてをカヴァーしているとは、当然、誤りでであろう。日本の近代化を支えた企業家たちの、学校系列を必ずしも手段としない「立身出世主義」のもう一つの側面、すなわち、革新的な経済行動に専心して致富へと向かう企業家のエートス——企業家精神——が語られずに残されている。急速な上昇移動が可能であった〈英雄的僥倖の立身出世主義〉の時代の企業家精神、そしてとりわけ金銭的アスピレーションに関しては、いまだ語られない。そして〈秩序的立身出世主義〉の時代以降に関しては、修養主義の機能が明快に説明されたが、「代替」により一旦加熱した金銭的アスピレーションが修養主義へと吸収される過程については詳細には語られず、総体的に見て、むしろ見田の議論よりも一層、金銭的アスピレーションが学校系列による社会的選抜のいわば影の部分として捉えられ、「立身出世主義」に占める企業家の位置も語られずに残されている。

それに、議論の細部には多少の疑問もある。修養主義は加熱したアスピレーションを「縮小」「冷却」する機能を果たしたが、反面、「藤吉郎主義」とその変化形である「金次郎主義」がその時代のアスピレーションの達成手段として機能したとする点である。「縮小」「冷却」しつつ達成手段の機能を果たすという一見矛盾したエートスが新たな「立身出世主義」として捉えられるのだが、しかし、経済行動に議論を限定した場合、「縮小」「冷却」の機能を持つこうした〈修養的立身出世主義〉は、はたして営利の追求を促進するものなのか、むしろ営利の追求を抑制するものではないのかという、素朴な疑問が出てくる。企業家精神のなかで金銭的アスピレーションは、はたして全面的に低下したままだったのであろうか。

このように、企業家精神の内容分析は、問われずに残された「立身出世主義」の半面を

照射するという意味を持つことになる。見田や竹内に代表される「立身出世主義」の議論の出発点は、日本近代化をいわば下から支えた庶民が明治以降の激変する時代のなかでアスピレーションをいかに処理し、適応したのかであるが、この出発点の選択が、「立身出世主義」を社会的選抜に乗れない庶民の受動的なエートスとして描く理由となったとも考えられる。したがって、「立身出世主義」の能動的な側面を探る方策として、維新以降、実際に経済的成功を果たし、日本の近代化を牽引した企業家——いわば近代日本の経済エリート——の精神にサンプルを絞るという方針が有効となってこよう。

以下の章では、こうした見田や竹内の「立身出世主義」をめぐる概念を補助線としながら、維新後に経済的に成功した明治・大正期の企業家が残したテキスト（成功書・自伝・日記など）から、近代日本の企業家精神に接近してゆくつもりである。ただ、たしかに企業家の著書を素材にするのは、彼らの言説内容に直接触れるという点できわめて有効な方法であるが、記述がすべて真実なのか、粉飾はないのかという問題が常につきまとう。しかし、本稿では、企業家精神にとりあえず出来るかぎりの接近を試み、全体的なイメージをつかむことに集中し、後に粉飾の問題に若干触れ、疑問点の提示を行なうことにする。

また、既述のようにこうした分野の先行研究はきわめて少なく、かつ、近代日本の企業家といえどもその数はきわめて多いので、本稿は以下のように対象を限定し、企業家精神に関する総合的研究の一つの端緒を提示したい。この分野では貴重な研究のなかで、J・ヒルシュマイヤーは明治初期に立志・蓄財した企業家（1860年以前生まれ）を分類し、独立独行的かつ半官的で政府から特権を得て蓄財した財閥創始者である1840年以前生まれの企業家を「年長グループ」（たとえば、岩崎弥太郎、大倉喜八郎、安田善次郎、五代友厚、森村市左衛門、渋沢栄一など）、そして、政府にあまり依存せず株式会社設立に進んだ1840年以後生まれの企業家を「若年グループ」（たとえば、藤田伝三郎、馬越恭平、益田孝、浅野総一郎など）と名付けている（ヒルシュマイヤー：87）。本稿では、このヒルシュマイヤーの分類に従いながら、さしあたって第一の世代に焦点を合わせ、そのなかでも武器輸出を中心とする大倉財閥系の各種企業を創始した大倉喜八郎（1837-1928年）、安田銀行等の安田財閥系関連企業を創始した安田善次郎（1838-1921年）、日本陶器・富士製紙等の森村財閥系関連企業を創始した森村市左衛門（1839-1919年）、王子製紙・日本郵船等の企業創立に関わった渋沢栄一（1840-1931年）の四人を中心に取り上げる。それは、一つには彼らが近代日本の経済エリートの第一世代のなかでもきわめて著名であり、しかも彼らの出生年が接近しており、同一世代として共通の企業家精神をかなり明確な形で抽出することが期待できるからである。それに、彼ら四人は明治後期から大正期にかけて少なからぬ著作を残しており、著作を本来あまり残さない企業家たちのなかで、彼らの

思想を知り得る貴重なサンプルとなるからである。

そこで次章では、企業家精神を多角的に捉えるため、四人のテキストで共通に語られる項目、すなわち、それぞれの出自・立志前の境遇、立志の動機、信仰および成功のモデル、成功致富のための哲学、蓄財観（ないし金銭観）をそれぞれ分けて取り出し、それを順次提示してゆき、その後の章で彼らの企業家精神の比較・分析と、社会的背景を考慮した若干の分析を試みたい。

三 立志の動機、成功哲学など

(1) 出自・立志前の境遇

この項目では四人の企業家の紹介をかねて、とりあえず幼少時の家庭環境を、彼ら自身の記述をもとに簡潔に記しておこう。

(a) 大倉喜八郎

新潟の帯刀を許される「町人の中では格式のある家」の五人兄弟の第四子として出生した。家庭は比較的裕福であったという。家業は質業であり、幼時より王陽明派の学者の私塾で家業手伝いのかたわら勉学に励み、四書五経・習字・珠算などに親しんだと語っている。（大倉1911：29）

(b) 安田善次郎

富山藩士の「ごく小身な家」の五人兄弟唯一の男子として出生した。最下級士分で、貧窮ゆえに傍らで農業も営むような家庭であったという。教育は寺子屋で習う程度だったが、幼時から畑仕事や写本の内職をしており、軍記本を写しながら読むのが楽しみであったという。（安田1911：38-9）

(c) 森村市左衛門

江戸の旗本出入りの袋物商（武具・馬具等）の長男として出生した。「豪侠」な祖父が莫大な借金をし、父がその後に家業を盛りたて再興した。幼少時の教育は手習い程度であったが、16歳のときに病弱のため丁稚奉公を諦めて実家に帰り、辞書を引きながら、（尊王攘夷運動に影響を与えた）頼山陽『日本外史』を読破したと記している。そして、同じ年に、大震災で災害を被り、再び借金を背負う困窮生活に戻ってしまったという。（森村1929a：58）

(d) 渋沢栄一

埼玉で養蚕・製藍を営む豪農に出生し、父の代には金融業をも営む資産家の家庭であった。幼少時より父や儒者から早期教育を受け、四書五経等を学び、相当な読書力を身につ

けるに至ったという。のち、20歳を過ぎて江戸に遊学し、「当世の志士」と交遊しながら漢籍の勉強の傍ら剣術を学んだという。（渋沢1984：16-8, 31-2）

(2) 立志の動機

明治から大正にかけて企業家の残したテキストの叙述形式として、(1)の立志前の境遇の次に（あるいはそれを敷衍する形で）、実業界に身を投じる決意を促した若き日のエピソードを語る場合が多い。立志の動機の形成、すなわち企業家精神の生成ないしアスピレーションの生成を知るという点で重要な記述であると言える。

(a) 大倉喜八郎

王陽明派学者の私塾に通っていた頃、学友の境遇に同情し発奮したという。すなわち、学友の父が侍と路上で遭遇し、雪混じりの泥道なので平伏せず敬礼すると、「意地悪く糾明され」、家業の一月営業停止を命じられたという。大倉はその境遇に憤慨し、「目付風情の奴があれこれというて、大切な商売の妨げをするというのは憎い振舞いだ」、「こんな国にいるのが間違っているのだ」と感じ、江戸へ出る決心を固めたと記している。（大倉1911：30-1）

(b) 安田善次郎

16才のとき、大阪の富豪の手代が藩主に貸す金を持って参じたとき、「平常自分等に大威張りに威張っている勘定奉行がまた大勢の供廻りを連れて、町人の手代を城下まで出迎えにいくという騒ぎ」を目撃する。そのとき、「如何に素町人でも金さえあれば大名であるとの念が堅くなった。金の力と云ふものは何と偉大ではないか」と感じ、「己れも今から一生懸命に稼いで大金持ちになってみよう、これならきっと己れにも出来る」と決心したという。（安田1911：51-2）

また、それ以前の次の体験も立志に大きな意味を持っていたという。すなわち、幼少時に父と城下を歩いていると、家老格の武士と遭遇し、父は足駄を脱ぎ、雪の上に座ってお辞儀をしたが、「私は少年の身ながらも甚だ情なく思ふた」という。（安田1912：98）

(c) 森村市左衛門

(1)のように震災にあって貧困に喘ぐ家を再興しようと「発奮自励」した。次のように語っている。「断じて祖先の祀を断つまい。断じて他人の力に依頼せずして独立で老親や弟妹を養育する。何んなに困っても不正不義は取るまい」（森村1912：359）。その後、森村は様々な内職により家を再興させるうちに大商人になっていったという。

(d) 渋沢栄一

17歳のとき、領主から御用金をいいつかい、父の代理として代官と面会した際、代理ゆ

えに御用金差出し承知の即答はできないと述べたところ、代官にひどく叱られ、嘲弄された体験が奮起のきっかけとなったという。「如何に領主の仰せとは申しながら私の方は御用金を頼まれる方である。年齢が若からうが、身分が低からうが頼む方と頼まれる方との関係であつて見れば、当然相当の取扱ひをするのが道理であるべき筈である……」と記している。（渋沢1927：32）

(3)信仰および成功のモデル

立志の後の起業・経営活動において指針となった信念に関し、彼らが宗教や特定の人物など、具体的に述べたもののみを次に記しておこう。

(a)大倉喜八郎

特定の信仰があったことは認められないが、スマイルズの『セルフヘルプ』に感銘を受けたとの記述がある。

(b)安田善次郎

(1)で記した幼少の頃の写本で、『太閤記』を読み、「あれだけの地位を得るまでの順序は決して一攫千金のものではなく、秩序もあれば階段もある、すべて順序をおうてきたという点が痛く私に感動を与えた」と記している。また、致富後には神社へ熱心に参拝しており、「神人感応の体験」をしたと記している。（安田1911：39, 1918：198）

(c)森村市左衛門

森村家は熱心な仏教徒で、森村自身、10歳の頃に出家の願望があったらしく、致富後に高野山明王院を建立しているが、その後、キリスト教へと改宗している。また、16歳のとき、「天下の富豪三井家のやうなものになりたいと云ふ希望を起こした」という。さらに、「国民のためを思って一身を犠牲に供したものであるから」、佐倉宗五郎と大塩平八郎を尊敬するという記述もある。（森村 1929b：127）

(d)渋沢栄一

「論語」「中庸」等を心読の書としている。また、(1)で記したように、若かりし日に幕末の志士に交じって剣術を習って以来、武士道に造詣を深めるようになる。彼によれば、「武士道の神髓は正義、廉直、義侠、敢為、礼讓等の美風」であり、「日本人はあくまで大和魂の権化たる武士道を以て立たねばならぬ」という。（渋沢1916：197-9）

(4)成功の哲学

彼らのテキストの中心部分である成功の哲学は、彼らの人生哲学・生活の信念に深く結びついたものとして語られている点で、経営態度の指針とともに生活態度の指針を知らう

えて重要である。企業家精神の中核的な位置を占める項目であると言える。以下にそれぞれの成功の哲学の中心部分を要約しておく。

(a)大倉喜八郎

成功の理由は、「自分の思ふ所に向って猛進したのと、五十余年間の悪戦苦闘の結果」と総括し、具体的な処世法として以下の点を挙げている。①「虚業に手を出さぬ事」、②「国家を利する所の事業を行らうと云ふ考え」（大倉は陸軍御用達商であった）、③「実業界にも貢献したいと云ふ考え」（商業学校建設によって実業教育の普及に努めたことを指す）、④「名の為に事を為さない事」、⑤「分限を守る事」、⑥「活働主義精力主義を執る事」、⑦「事に望んだら決心を堅め、断行する事」。（大倉1911：24-6）

(b)安田善次郎

成功の理由を、「凡ての誘惑に打ち克ち克己の生涯を続けたこと」と総括し、「克己貯金」という言葉を成功の哲学として掲げている。安田によれば、「克己貯金」とは「克己制欲主義」と「勤儉貯蓄」を組み合わせたものであり、「勤儉貯蓄」という目的のために「克己制欲」を手段とする経済的な行動を意味すると同時に、「克己」という目的のために「貯金」を手段とする「精神修養」の態度をも意味するという。（安田1912）

(c)森村市左衛門

成功の理由を端的に述べれば「奮闘主義」であるという。それも、一つの信念、すなわち、「労働は神聖なもの」なので「奮闘する気力」を維持し「正直な労働」をできるだけ多く天に預けておけば、天は正直だから後になってたくさん報酬が還ってくるという信念に裏付けられた態度である。そうした「奮闘主義」の立場から、一攫千金を願わない堅実主義、投機の回避、「独立独歩」の姿勢などの徳目を語っている。また、「『自分の今現在やッてをる商売より、やゝ大きくしたい、もう少し資本を豊にして見たい』と望むだけで、決して大富豪になりたいとか、第一流の商業家になりたいとか図ぬけた望を起したことはありません」と記している。（森村1912,1918）

(d)渋沢栄一

先の「正義」「廉直」といった徳目に代表される武士道や儒教への造詣とあいまって、独自の倫理を展開している。すなわち、「士人に武士道が必要であった如く、商工業者もまたその道が無くては叶わぬことで、商工業者に道徳はいらぬなどとはとんでもない間違いであったのである」とし、商工業への武士道の徳目の注入（「実業道」「士魂商才」）を説く。さらに、「義利合一主義」ないし「道徳経済合一説」を成功の哲学として提唱する。つまり、自己利益ばかりに偏ると事業に無理が生じやすく、却って破綻しやすいので、国家にとっても損失であるとし、自己利益と「商業道徳」とは本来調和するはずであり、

また、調和させるべきであるとする説である。実際、渋沢自身も「明治初年以來道徳と経済の合一を主張し、且つ之れが実行を旨として今日に及んでゐる」とし、「実業界にあって活動して居る頃には、屢々利を以て誘はれた事があつた」が、「私は常に正しい道理の上に立って斥け、一度も自分の履むべき道を誤らなかつた」という。（渋沢1927：464-6, 1916：23,116-9,197）

(5) 蓄財観（ないし金銭観）

彼らの金銭的アスピレーションの様態を知るため、金銭に関する直接的な記述を以下に列挙しておく。

(a) 大倉喜八郎

自分が富豪になったのは「社会的趨勢」によるところが大きく、「国家の恩」に感謝すべきであるとし、「金は、皆国家社会の爲めに投じ、……世を辞したい」とする。ただ、「金の爲めに、あらゆる困難辛苦を嘗めた人でなければ、真に金の有難味は、解らないものである」、「『金銭の無いのは首の無いより尚ほ辛い。』と云ふが、全くさうである」とも述べている。（大倉1911：135-6）

(b) 安田善次郎

「金である。金さへあれば到る所誰も優遇され、誰も優遇するのではあるまいか。……生存すると云ふ点より云ふ時は金より大事なものは何もないのである。そこで金を尊ぶと云ふのはその生命を重んずると云ふのに等しいのだ」と述べるように、「克己貯金」の貯蓄至上主義の立場から、金銭至上主義を打ち出している。（安田1912：78）

(c) 森村市左衛門

「虚栄を眼中におかず、それに費す費用を転じて、貯蓄といふことに心付いたならば、それは実に大なる美德であります。……貯蓄の爲めに、買ひたいものも買はず、食ひたい物も、忍ばなければなりませぬから、苦しい様ではありますが、それが段々利息と共にふえて来るに従ひ、次第に興味を持ち、つひに大に貯蓄を励むようになりませう」。このように貯蓄を推奨しながら、他方では、国家のために事業をするのに金が欲しい、したがって、「唯金を蓄めるのが馬鹿馬鹿しい」と、貯蓄主義を排撃している。（森村1911：88-9,1912）

(d) 渋沢栄一

「義利合一主義」の立場から、「富を増したいといふのは世間普通の人情」だが、「積んだ富を国の爲めに散じ、それに依つて社会の事物或ひは秩序の進む様にして行く」ように心掛けるべきであると説いている。（渋沢1927：455）

四 考察

それでは各項目につき、考察を加えていきたい。

「(1)出自・立志前の境遇」に関しては、先にも述べたように明治以降の企業家の封建的出自を特定しようとする一群の研究があるので、これ以上の考察は見合わせる。

「(2)立志の動機」に関しては、森村だけが傾いた家の再興というタイプの動機であり、他の三者は、少年期に代官や大名らの態度に反発し発奮したというタイプである。立志動機の分析としてきわめて貴重な鳥羽欽一郎の研究は、『私の履歴書』を資料として、1864年から1916年の期間に出生した企業家の出自・学歴等を分析したが、その際に使用された動機の語彙として頻出する立志動機の種類カテゴリーは、森村に見られる「家業・家運の再興」、そして「両親・兄弟の面倒」「実業家としての成功・出世」「専門分野での活動、日本の将来と国家への貢献」「社会に対する責任感・使命感」の5つである（鳥羽1988）。鳥羽はそこで森村のタイプは新しい世代ほど減少することを確認している。また、武士身分への反発という他の三者に見られる動機は、世代の違いから当然、これらのカテゴリーには含まれていない。したがって、家運の再興を含め、これら四人に見える立志動機は、少なくとも企業家第一世代にとっては後の世代と比して大きな意味を持つ動機であったと言える。

立志の動機は、竹内が詳述しなかった明治前期の〈英雄的僥倖的立身出世主義〉の時代の企業家精神の典型例を探るうえで重要である。まず、森村の場合、彼の企業家精神の形成過程は、まさに安丸良夫が明らかにした近世後期以降の通俗道徳の形成の相似形であったと言える。安丸は「日本近代社会成立期の社会的激動の渦中において、広汎な人々が自己形成・自己鍛練という課題に直面しており、通俗的徳目の樹立は、この課題がはたされる具体的な形態にほかならなかった」（安丸1974：30-1）とし、「家」の没落という時代の転換期の経済的な現実問題の解決のために、克己・努力のいわば求心的な力が生じたとするが、森村はその典型であると言える。ただ、この求心力は「家」の再興を端緒とするので、富の獲得に多くの関心を注ぐ。借金を皆済した森村は次のように記している。「安政六年十二月大晦日に借金皆済したり。其時の心嬉敷事譬へんに物なし。二百文程にて松竹注連飾を買集め、自身にて打付けたる其心中、我独りの愉快、満腔の随喜、数年の辛苦を一時に忘れたり」（森村 1929a：67）。(5)で記したような国家のための利他的蓄財を説く森村だが、ここに他者を意識から排除した通俗道徳の孤独な自己鍛練の姿、そして金銭的アスピレーションの緩やかな加熱を見出すことができよう。

他の三者の場合は、商業活動の妨害となる横柄な武士身分への不信、および、商業活動への誇りが共通に語られる。すなわち、近世末期の社会構造としてしばしば指摘されている、社会的威信のある武士身分に経済力が乏しく、威信の乏しい商人に経済力があるという、威信と経済力の逆転的な構造に対して²⁹、不満が表明され、それが立志の契機となっている。彼らは社会構造ないし武士身分に対する怨恨をはらんだ社会批判の立場、変革・解放の立場であり、求心的で禁欲的な森村のようなタイプとは逆の、革新的で、いわば遠心的なタイプである。ただ、こうした革新的な社会批判の立場が先の(5)の大倉や渋沢に見える国家の利益のための商業活動という利他的な思想に直結するわけでは決してなく、むしろ、(2)のエピソードから読み取れるように、自由で個別的な商業活動の尊重という経済的個人主義の一種と見なすのが適切であろう。だから、安田のように、金力に対する極端な信頼、金力万能の時代の予感を表明することにもなる。したがって、立志の動機に関しては、求心的なものか遠心的なものかという意識の方向性の決定的な違いはあるが、金銭的アスピレーションの貯えは四人に共通に見出せるのである。

武士身分への不信という動機に関しては、社会的背景の点で付言すべきことがある。この動機は、竹内や見田によって展開された説明のパターン、すなわち、学校系列を中心とする社会的選抜に乘れない者たちの「代替」として金銭的アスピレーションの加熱を捉える説明のパターンときわめて類似している点である。つまり、学歴面での優位者に対する怨恨か、封建身分の優位者に対する怨恨かという相違はあるが、達成できない地位アスピレーションの代償満足という意味で成功願望を捉える点では一致している。この一致は、彼ら四人の企業家がテキストを書いた時代の状況と密接に関わっている。すなわち、ここで参照している自伝や著書を彼らが著したのは、およそ明治後期から大正期にかけてであり、この期間、日露戦争後明治40年の株式ブームや第一次世界大戦中から始まった大戦景気を背景にした、爆発的な成功書ブームが生じたのである。そして、彼らはそうした成功書の代表的な著者でもあった。彼らの著作は、回想録をも含めて成功書の叙述形式を踏襲しているのである。つまり、正系の学校系列に乘れない多くの若年層が輩出した社会的な閉塞状況に、好景気が断続的にやってくる経済的状況が加わるなかで、彼らの著作は致富への導きという成功書の本来の意義から、若年層の地位アスピレーションを金銭的アスピレーションへと「代替」させるという時代の要請に応えるように——まさしく先の竹内の説のように——機能していたし、また、応えるように意図されて書かれたとも言えるであろう。したがって、この反特権的で革新的な立志の動機も、立志当時の“真実の”動機——ないしその当時彼らを選んだ動機の語彙——であると同時に、テキストを記した時代に影響を受けながら彼らを選んだ——あるいは状況が選ばせた——動機の語彙でもある

ことに注意しておくべきであろう。

さて、次に「(3)信仰および成功のモデル」に関してであるが、この項目は四人の企業家のなかできわめて変化に富んでおり、それぞれが異なる対象に照準を合わせ、経営・生活の指針としていたと言わざるをえないであろう。大倉は「セルフ・ヘルプ」に感銘を受け、修養主義そのものに自己の経営態度と通じ合うものを見出し、安田は幼少時に自己の境遇と太閤秀吉の下積み時代とを重ねつつ、「段々出世主義」を立身出世の指針と定めている。こうした疑似修養主義的なモデルが見られる反面、安田・森村のような庶民的な神仏信仰、渋沢のような儒教・武士道への専心もあるといった具合である。

ただし、これらの背後には共通の信念がないわけではない。「(4)成功の哲学」から窺えるように、精神主義という点では一致している。筒井清忠は、江戸から明治にかけての「日本人のエートス」としては、庶民層に普及しており自己利益を肯定する傾向が強い「通俗庶民道徳」、および、武士・士族に見られた国家への貢献に重点を置いた「武士道」という二つのタイプを挙げることができるとし、いずれも「努力・奮励」などの「修養」主義的要素を共通に持っていた点から、明治後期修養主義の初期形態という意味で、両者をまとめて「前期的修養主義」と名付けている（筒井1993）。ここで取り上げた企業家たちも、やはり、それぞれが「前期的修養主義」の体现者であると言えよう。一方で森村が没落の危機に瀕した「家」の再興を端緒とする自己鍛練（「奮闘主義」とそれに連なる通俗的徳目の忠実な実践）という典型的な通俗道徳の体现者であり、他方で渋沢が「正義」「廉直」などに基づく「実業道」を唱えた典型的な武士道タイプの体现者であるといった違いはあるが、すべて精神主義的な努力主義という徳目へと収斂していると言えよう。

そして、こうした「努力・奮励」といった共通点と〔自己利益——国家の利益〕という対比は、彼らの成功の哲学にも一定の分析軸と一定のヴァリエーションが存在することを示してくれる。「(4)成功の哲学」を一瞥すれば、やはり大倉の「活動主義精力主義」や安田の「克己制欲」に代表されるような努力主義ないし修養主義的態度、すなわち、アスピレーションを「縮小」しつつそれを職務に集中させる「第一等主義」と全く同じものを、四人に共通の態度として容易に見出だすことができる。各企業家はこうした態度を手段として営利を追求したわけであるが、彼らの営利の目的は、〔自己利益——国家の利益〕という軸によって分類することが可能である。（図1参照）

ただし、他の第一世代の企業家のテキストを読んだ印象では、およそ自己利益か国家の利益のいずれか一方のみを目的に掲げる企業家はほとんどいないと言ってもよいように思われる。先に掲げた「(4)成功の哲学」および「(5)蓄財観（ないし金銭観）」を一瞥して分かるとおり、ここに取り上げた四人の企業家のテキストにおいても、国家の利益に通じ

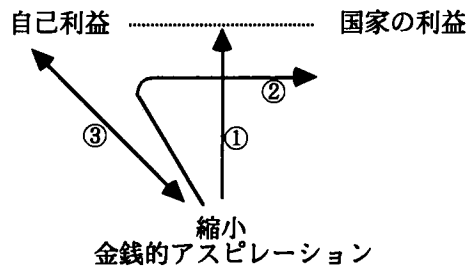


図1 注：矢印の指し示す方向が目的

るような経営の心得、自己利益に偏った経営の排斥、国家への自己利益の還元といった様々な形式で、自己利益と国家の利益の調和がしばしば力説される。作田啓一は、近代日本人の価値観の場合、「何かをうまくやってのけたい」という達成動機は、西欧の個人的業績価値を強調する達成動機に比して、集団への貢献価値を強調する達成動機が強いと指摘したが（作田113-23）、四人の企業家のテキストにおいても、これは如実に表れている。ただ、多少の個人差はある。大倉や渋沢が「自己利益＝国家の利益」と捉え、両者の本来的なバランスに理想を見出すのに対して（図1の矢印①）、森村の場合はむしろ、最終目的は国家であって、自己利益は最終目的の手段に過ぎない（図1の矢印②）。孤独な自己鍛錬による営利の追求の果てに到達した自己犠牲とでも表現できよう。「自己を犠牲としても、国家将来のため、社会人類のために働くといふ覚悟は、事業をなすの秘訣であると私は断言する」と、自己犠牲の態度を鮮明に打ち出し、実際、教育事業へ多くの援助活動をした森村は、第一世代のなかでもとりわけ国家の利益の極へと大きく傾いた企業家であろう（森村1929b: 230）。それに比べ、安田は対極の位置にあると言える。彼は一切自己利益の追求を国家の利益と関連づけて述べない数少ない企業家である。「(4)成功の哲学」で述べたとおり、彼は貯蓄のための克己制欲、克己制欲のための貯蓄を経営のモットーとした（図1の矢印③）。彼のモットーのうち、前者は竹内の金次郎主義（職務にアスピレーションを集中させる「第一等主義」）に合致するが、後者は、経済的成功の手段である克己の生活態度を自己目的化した修養主義、すなわち、修養主義的生活態度を上昇移動のための手段としないという意味において“純粋な”修養主義である。先に見た「(2)立志の動機」における利己的な経済的個人主義と修養主義的な人格主義との融合形態をここに見出せよう。彼の個人主義的態度は一貫しており、自己犠牲に傾いた森村とは逆に、寄付や慈善といった利他的な行為を全否定することにもなる。彼の個人主義的態度と寄付・慈善行為に対する態度との関わりは、次の箇所から明瞭に読み取れる。「人の厄介になること

を甘ずる人間は本来意気地のない人間である。……謂ゆる慈善はややもすれば姑息の手段に流れ、却って人を懶惰に導く結果となり……現に世の慈善家を的に商売をして居る偽善家が少なくない……。それで私は誰に向っても勤儉貯蓄独立独歩一天張りで説いて居る……。」（安田1918：63-4）

しかし、こうして安田のように個人主義的態度を表明する企業家があり、様々なヴァリエーションの企業家の存在が確認できたとしても、やはり、ここでも先の立志の動機の場合と同様に、それぞれが社会的な影響を受けながら最終的には共通のエートスへと収斂していることには注意を要する。すなわち、竹内が説明していない成功書の「縮小」機能に関してである。既述のように、学校系列に乗れない若年層の「代替」によって「成功ブーム」がまき起こったのだが、その結果、相場に手を出す若年層の増加や努力を軽視する風潮に見られるような金銭的アスピレーションの過度の加熱が社会問題となっていた⁹⁾。そして、この加熱した金銭的アスピレーションを「縮小」という、時代の修養主義的要請に——意図的か無意図的かを問わず——応える形で努力主義・「第一等主義」が記されたという側面がある。たしかに、修養主義的経営態度・生活態度は、彼らを手堅い経営に導いた近代日本の経営のエートスの一構成要素であったと言えよう。しかし、我々が入手できるテキストを彼らが記したのは、ほとんど彼らが致富したあとなのである。テキストは事後的に構成された回想でしかない。

ここから、まず、成功の哲学などで語られるような国家の利益への意識は若い頃からこれほど強いものであったのかという疑問が生じる。そして、既に「(2)立志の動機」で、四人の企業家も立志当時は経済的個人主義等の利己的色彩の強い動機を持っていたことを確認した。しかし、より大きな疑問は、努力主義に内在する「縮小」され低下している金銭的アスピレーションに関してである。「(5)蓄財観（ないし金銭観）」に見えるとおり、彼らは時折、露骨とも言える金銭崇拜の言葉を記している。また、「(2)立志の動機」とその考察で述べたように、安田は社会的威信に匹敵する金力への確信を語り、森村からは金銭に対する感情移入の大きさが窺える。金銭的アスピレーションの低下と上昇が同時に表れるというこうした矛盾は、成功書が果たした先の二重の機能に対応している。すなわち、一方での学校系列に乗れない若年層の金銭的アスピレーションへの「代替」、そして他方での加熱した金銭的アスピレーションの「縮小」という微妙な社会的要請に——意識的か無意識的かは問わず——彼らのテキストは応えている。アスピレーションの奨励と抑制という微妙な役割が、企業家のテキストのなかで、修養主義的態度と金銭崇拜の共存という首尾一貫性のなさとなって表れていると考えることができる。だが、そうしたテキストの役割に関する問題よりも重要なのは、努力主義・修養主義的態度の背後に金銭的アス

ピレーションが巧妙に隠されていることであろう。

ここで、先の図1を上方へ拡大して、アスピレーションの「縮小」ないし低下とは正反対のケースであるアスピレーション維持という象限を作ってみる（図2参照）。この象限とは、金銭を志向するような経営態度ないし生活態度を手段として、自己利益（あるいは国家の利益）を目指す企業家精神の場として定義できる。森村・安田の場合、金銭崇拜の言葉が彼らのテキストのなかに散見される点で、金銭的アスピレーションが維持されていた一面があることが確認できる。たとえば森村の場合、既述のように立志以来の孤独な自己鍛錬には金銭的アスピレーションの緩やかな加熱が伴っていたし、また、「(5)蓄財観（ないし金銭観）」に引用したように、彼は貯蓄への興味を徐々に深めていくことを青少年に推奨している。そうした金銭的アスピレーションの自然な肯定が、最終目的としての国家への自己犠牲、国家への利益の還元という思想と直結しているのが、彼の蓄財観の裏面として指摘できよう（図2の矢印②）。また、安田は既述のように「克己制欲」を中心とする修養主義的態度を説くが、「(2)立志の動機」では「金の力と云ふものは何と偉大ではないか」と感じたことが立志の契機となったと語っているし、「(5)蓄財観（ないし金銭観）」では「金さへあれば到る所誰も優遇され」と語っている。金銭的アスピレーションの肯定による自己利益の追求だけではなく、むしろ金銭崇拜、いわば貯蓄をもとにした自己利益の追求を手段とした金銭的アスピレーションの自己目的化を確認することができよう（図2の矢印③）。

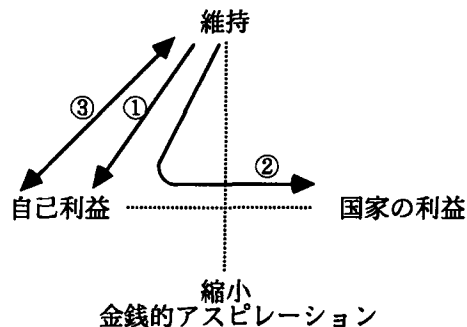


図2 注：矢印の指し示す方向が目的

しかし、大倉・渋沢の場合は、とくに自らの成功を金銭的アスピレーションの「縮小」によるものとして明確に位置づけるので、彼らのテキストからは、このアスピレーション維持の象限の手段－目的関係を推定することはできない。しかし、彼らがアスピレーシ

ン維持の経営態度・生活態度に相当する生活を送っていたことは間接的ながら伝えられている。たとえば、渋沢・大倉と親交のあった企業家福沢桃介は、彼らに「素々経綸の才などはない」とし、彼らは維新の「僥倖」や「投機」で成功した者であることを暴露する（福沢66-7）。僥倖と投機は努力主義・修養主義的態度とは正反対に位置する成功の手段であるし、とりわけ投機は彼ら第一世代の企業家自身がしばしば成功のために避けるべき行為として挙げる項目であり、かつ、金銭の獲得そのものを志向する行為である。それは金銭的アスピレーションの維持が前提となる行為であると言えよう。また、二者には蓄妾の事実があったと言われ、とくに大倉は豪華な別荘や邸を建て、茶会・宴会、所蔵書画骨董の展示会を頻繁に催していたことで有名であった⁽⁴⁾。こうした彼らの散財生活は、〔自己利益＝国家の利益〕とみる先の彼らの経営・生活における修養主義的態度と調和するのかどうか、少なくとも疑問である。こうした散財生活が彼らの生活上の最終目的のひとつであり、また、そこに獲得した金銭の存在をいわば誇示するという側面があるとすれば、彼らの蓄財は金銭的アスピレーションを維持（ないし拡大）しながら自己利益を目指す形式と考えることもできよう（図2の矢印①）。少なくとも、これらの間接的に伝えられる情報は、彼らの経営態度・生活態度における二重性を教えてくれる。

五 まとめと問題点

以上、近代日本の経済エリート、なかでも第一世代の企業家の典型例として4人の著名企業家を取り上げ、彼らが記したテキストから、立志の動機、成功の哲学、蓄財観などを抽出・分析した。彼らが表明する企業家精神の核心においては、金銭的アスピレーションを「縮小」させた「第一等主義」、すなわち努力主義ないし修養主義を中核のエートスとする自己利益（あるいは国家の利益）の追求という、竹内の金次郎主義と類似の形式が見出せた。しかしながら、他方、こうした修養主義の一変種も、金銭的アスピレーションの奨励と抑制の矛盾のなかで、アスピレーションの維持・拡大へと進む可能性があることも確認された。

そして他方、金銭的アスピレーションの「縮小」による努力主義・修養主義的な経営態度・生活態度が表明され、その背後に金銭的アスピレーションの率直な肯定が隠れているのは、若年層のあいだで加熱する金銭的アスピレーションの「縮小」という社会的要請に呼応するものであることを指摘したが、ここからは、努力主義は一方で企業家精神の典型的な在り方ではあるが、他方で粉飾を施され誇張された部分も多いことに気づかされる。企業家の側の意図の有無に関わらず、かりに近代化のなかで金銭的アスピレーションの肯

定が隠されてきており、努力主義の神話が作られてきたのであるならば、時代の状況から企業家へという一つの影響関係による粉飾のみではなく、粉飾による企業家の利害関係や企業家の位置する社会的立場や階級的状況といった総体的な布置状況を視野に収めなければならない。しかし、それは企業家のテキストから彼らの心性を抽出するという本稿の目的に収まりきれない大きな問題なので、別稿で改めて論じてみたい。

注

- (1) 企業家の封建的出自に関する研究群をまとめたものとしては、鳥羽の研究がある。
(鳥羽1988)
- (2) この構造は様々な論者によって指摘されているが、宮本の研究を代表例として挙げておく。
(宮本1977)
- (3) この社会問題は当時の新聞・雑誌で頻繁に取り上げられた。僥倖を願う若年層・成金に対する総合雑誌での批判に関しては拙稿参照。(永谷1992)
- (4) 渋沢の蓄妾に関しては『萬朝報』(1898年7月15日)、大倉に関しては次を参照。
(福沢1912:70-2、大倉1985)

引用・参考文献

- 大倉喜八郎 1911『致富の鍵』丸山舎(頁数は1992年の大和出版復刻版のもの)
- 大倉雄二 1985『逆行家族——父・大倉喜八郎と私——』文藝春秋
- 作田啓一 1969「報恩の教義とその基盤」『日本人の経済行動』下、隅谷三喜男編、東洋経済新報社
- 渋沢栄一 1916『論語と算盤』東亜堂(頁数は1992年の大和出版復刻版のもの)
1927『青淵回顧録』下、青淵回顧録刊行会
1984『雨夜譚』岩波書店
- 竹内 洋 1987『選抜社会』メディアファクトリー
- 筒井清忠 1993「近代日本における経営のエートス」『岩波講座 社会科学の方法Ⅲ 日本社会科学の思想』岩波書店
- 鳥羽欽一郎 1988『日本における企業家・経営者の研究』早稲田大学産業経営研究所
- 永谷 健 1992「近代日本における上流階級イメージの変容——明治後期から大正期における雑誌メディアの分析——」『思想』No.812、岩波書店
- ヒルシュマイヤー, J 1965『日本における企業者精神の生成』土屋・由井訳、東洋経済新報社
- ヒルシュマイヤー, J、由井常彦 1977『日本の経営発展』東洋経済新報社
- 福沢桃介 1912『無遠慮に申上候』実業之日本社
- 見田宗介 1971『現代日本の心情と論理』筑摩書房
- 宮本又次 1977『宮本又次著作集』第二巻、講談社
- 森村市左衛門 1911『少年実業訓』石井研堂編、博文館
1912『独立自営』実業之日本社
1918『怠るな働け』東盛堂
1929a『森村翁言行録』ダイヤモンド社
1929b『永遠の光』(財)修養団
- 安田善次郎 1911『富の活動』大学館

1912『克己実話』二松堂書店

1918『勤儉と貨殖』東盛堂書店

安丸良夫 1974『日本の近代化と民衆思想』青木書店

(ながたに けん・研修員・日本学術振興会特別研究員)

付記 本稿は平成6年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。

Mentality of the Economic Elite in Modern Japan: Consideration of four Entrepreneurs' Texts

Ken NAGATANI

Existing studies of ambition and the desire to gain wealth and to improve one's position in society during the Meiji-Taisho era have focused mainly on success attained through the educational system. Other routes have been neglected.

Referring to books written by four famous entrepreneurs in the Meiji-Taisho era, this article examines an often neglected route to success in life: entrepreneurship. This new attitude promoted a mania for new enterprises beginning at the close of the Tokugawa era. After showing their motivations for improving their positions in society, and examining their role models and ideas about their own success, we will see that their desire to make money was much stronger than previously reported by scholars. Then, analyzing the entrepreneurs' texts in a sociological framework, we will find among them a common moneymaking spirit that paradoxically consists of acts that improve their own minds by reducing their moneymaking aspirations. The main part of this article will interpret this paradoxical spirit as a result of two social conditions of the period during which they wrote their texts: economic prosperity, and the increase of young men who were unable to find success through the educational system. On one hand, entrepreneurs' texts encouraged young men to concentrate on making money rather than improving social position. On the other hand, they helped to cool down the fevered moneymaking aspiration among young men. Finally it will be pointed out that attitudes about making money were influenced by the social conditions.